

十勝岳の火山活動解説資料（令和7年7月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

62-2 火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では引き続き噴煙・噴気が多く、熱活動が活発な状態が続いています。今後の火山活動の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3～8）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上600m以下で経過しました。大正火口の噴気の高さは概ね100m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上概ね100m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は2018年頃からやや高い状態が続いています。

62-2火口では、16日夜に高感度の監視カメラでごく微弱な発光現象が断続的に観測されました。この現象は、62-2火口内での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられ、2020年6月以降時折観測されています。

6月25日～26日及び7月7日に実施した現地調査では、62-2火口及び隣接する振子沢噴気孔群で多数の噴気孔から高温の火山ガスが勢いよく噴出しており、一部の噴気孔付近には昇華硫黄が付着するなど、活発な熱活動が続いていました。赤外熱映像観測装置による火口温度観測では、62-2火口で、2024年6月27日の観測と比較してやや温度が上昇しており、2020年頃から引き続き高温を維持していることを確認しました。その他の火口及び地熱域では、特段の変化はありませんでした。

23日に第一管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測では、各火口の状況に特段の変化は認められませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-④～⑥、図9、図10）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は主に62-2火口のごく浅い所、旧噴火口付近のごく浅い所～深さ0km付近及びグラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近に分布しました。

19日及び23日に振幅が小さい火山性微動を観測しました。

・地殻変動の状況（図11～14）

23日の火山性微動と同期して、主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向がわずかに上下する傾斜変動が観測されました。2018年以降、62-2火口付近の火山性地震や火山性微動と同期した傾斜変動が時折観測されています。

GNSS連続観測では、2021年以降に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は概ね停滞しています。6月24日～6月29日に62-2火口付近で実施したGNSS繰り返し観測では引き続き、山体浅部の収縮を示す変動が観測されています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次の火山活動解説資料（令和7年8月分）は令和7年9月8日に発表する予定です。

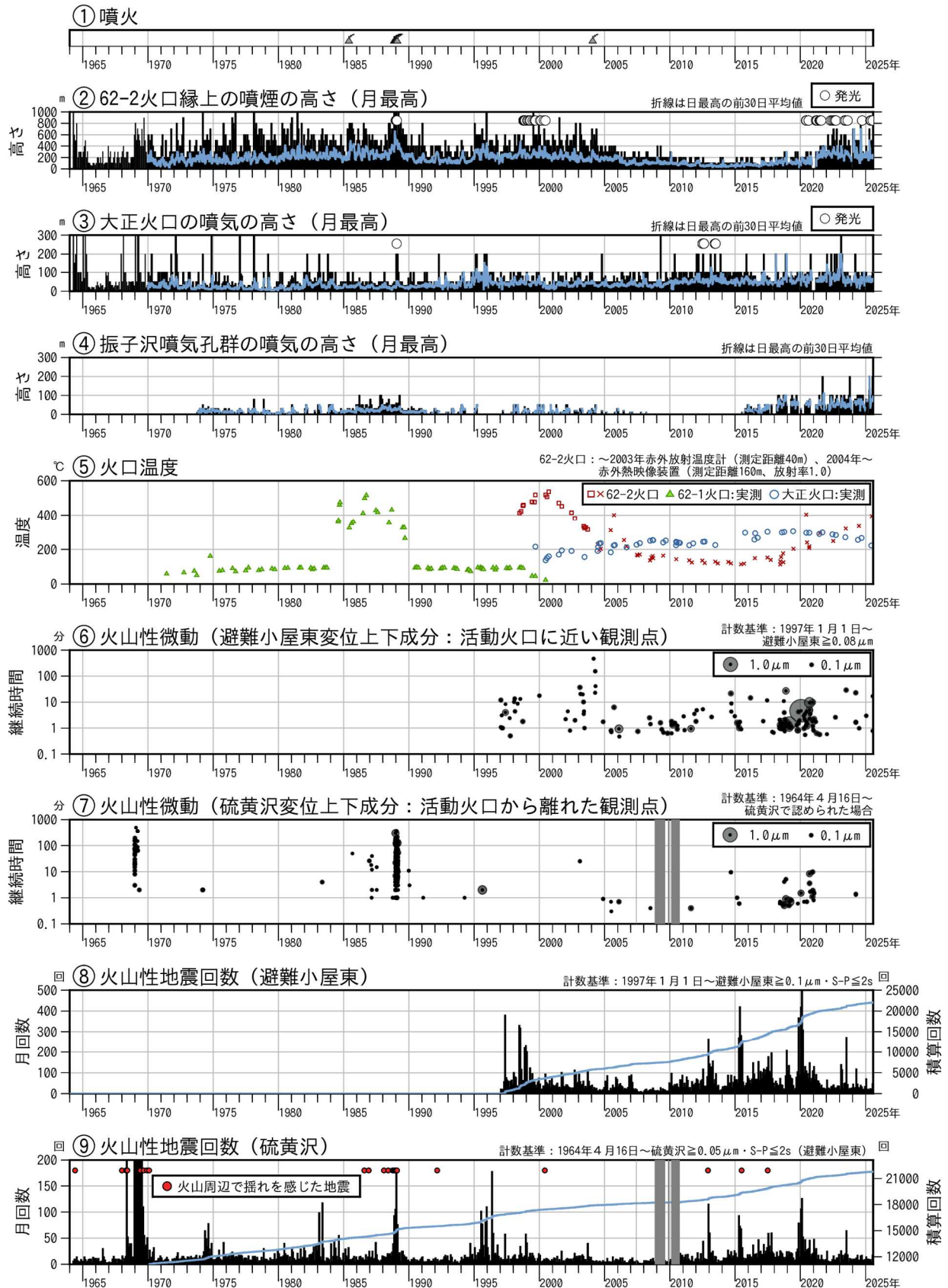


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2025年7月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び産業技術総合研究所のデータを含みます。
⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

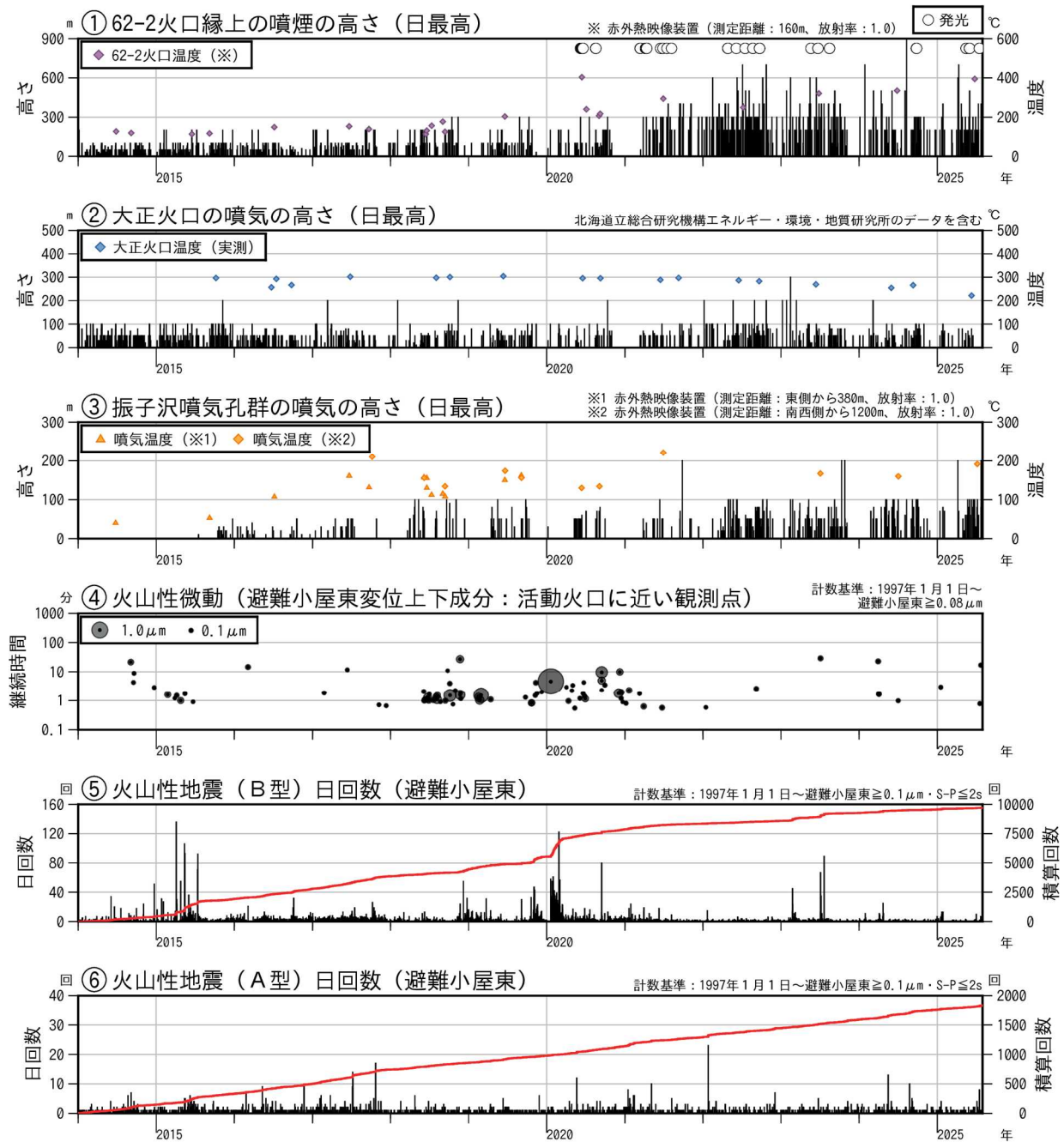


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2025年7月）

⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図9参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。



図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

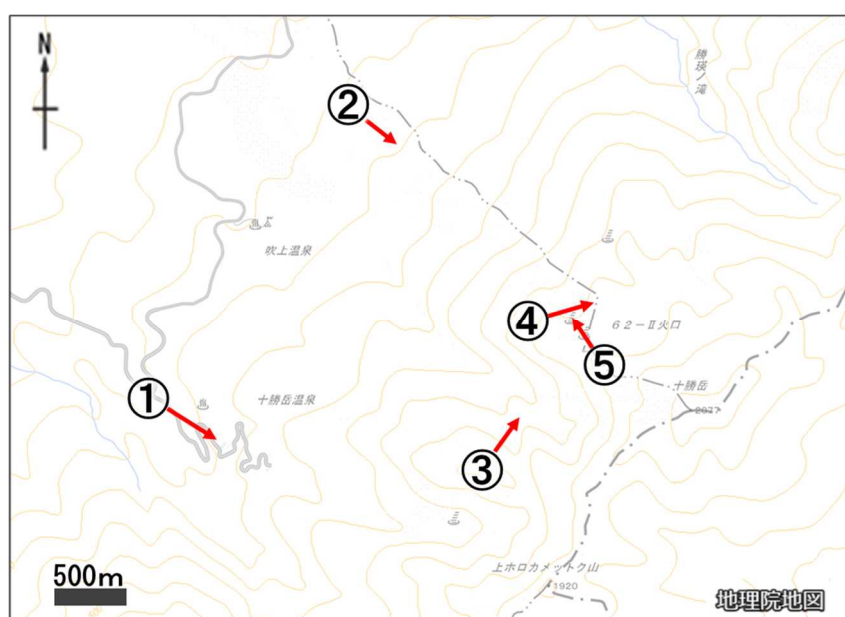


図4 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図5 十勝岳 大正火口、62-2 火口、旧噴火口の状況（左は図4の①から、右は図4の②から撮影）
・噴気の状況に特段の変化はありませんでした。

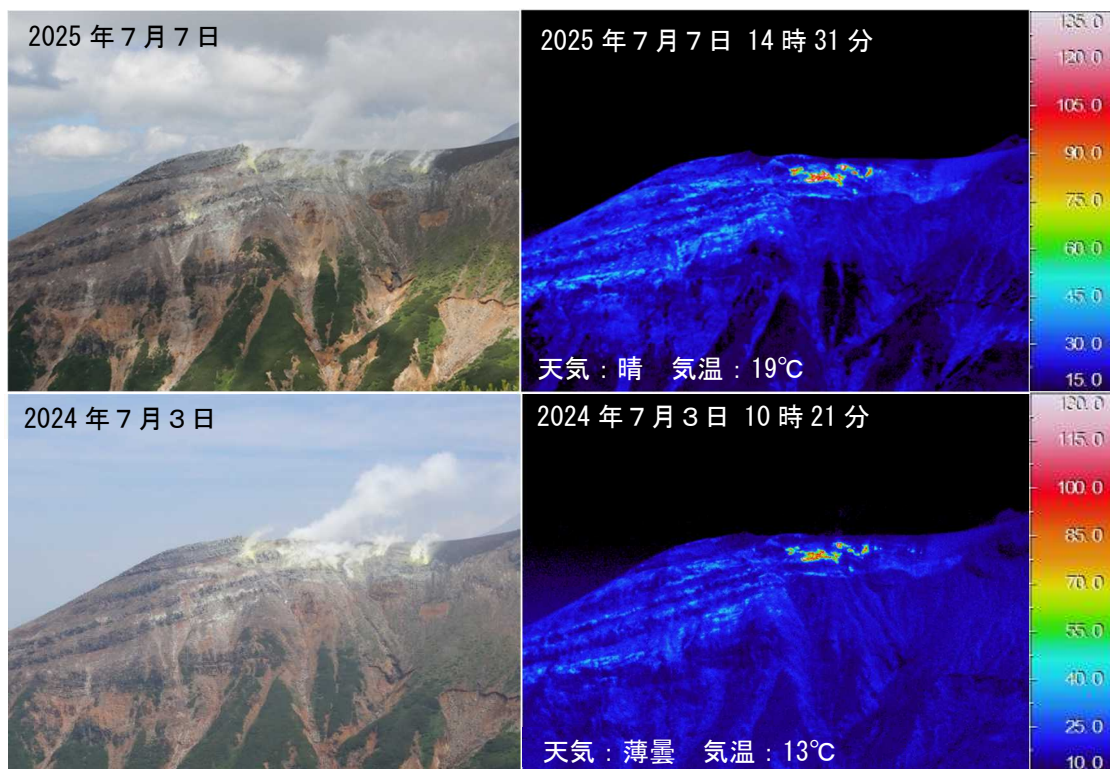


図6 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布（図4の③から撮影）
・噴気の状態や地熱域の状況に特段の変化はありませんでした。

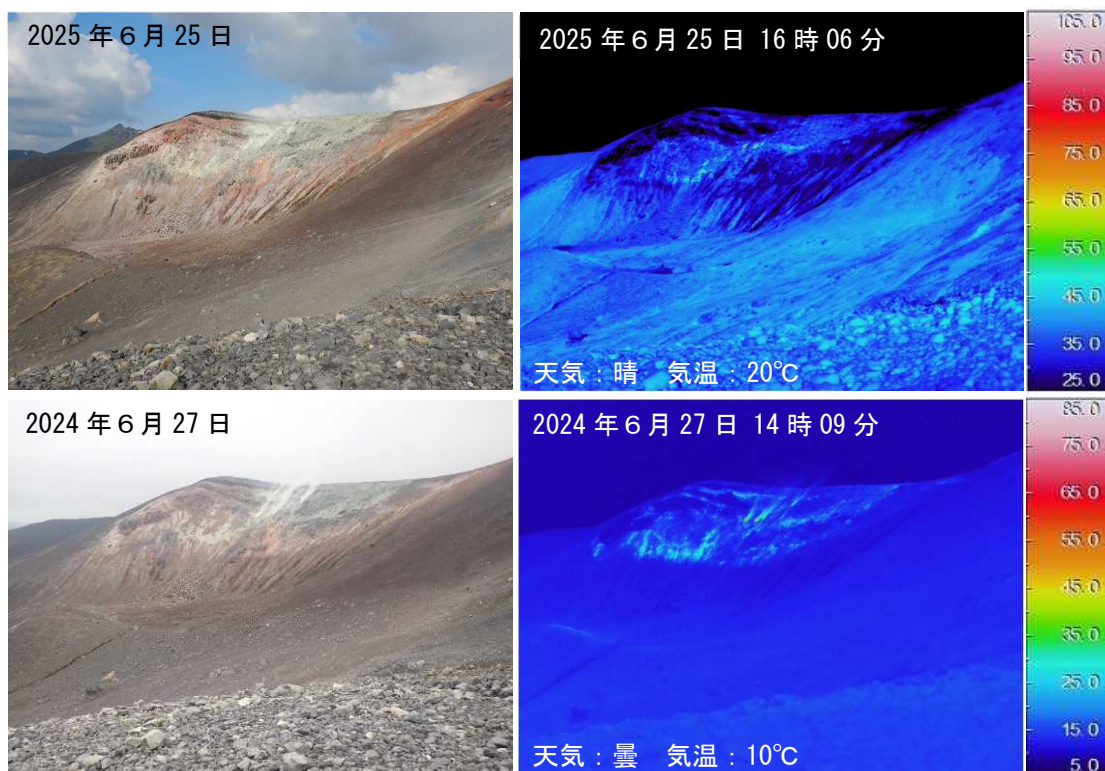


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による大正火口東壁の地表面温度分布（図4の④から撮影）
・噴気の状態や地熱域の状況に特段の変化はありませんでした。

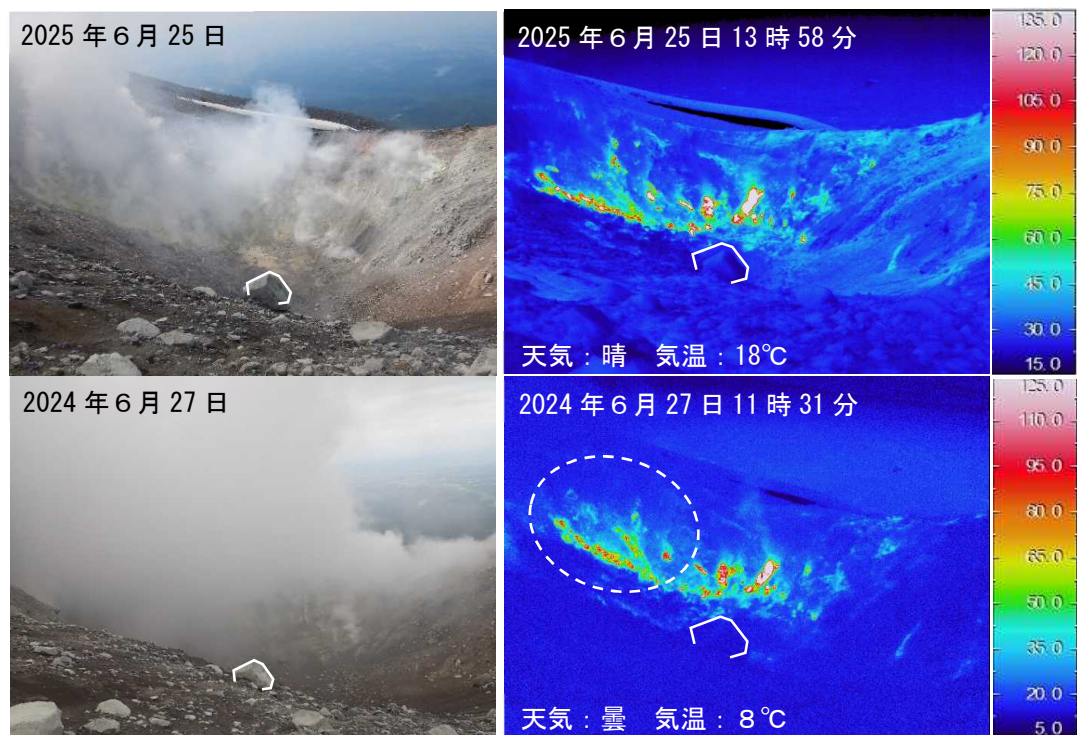


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2火口内の地表面温度分布（図4の⑤から撮影）
 白色実線は同一の転石の輪郭をトレースしたものです。白色点線で囲まれた範囲は噴煙の影響により一部熱域が隠れている可能性があります。
 ・火口内壁の北西側には引き続き高温の領域が分布しており、活発な噴気孔周辺には昇華硫黄の付着を確認しました。

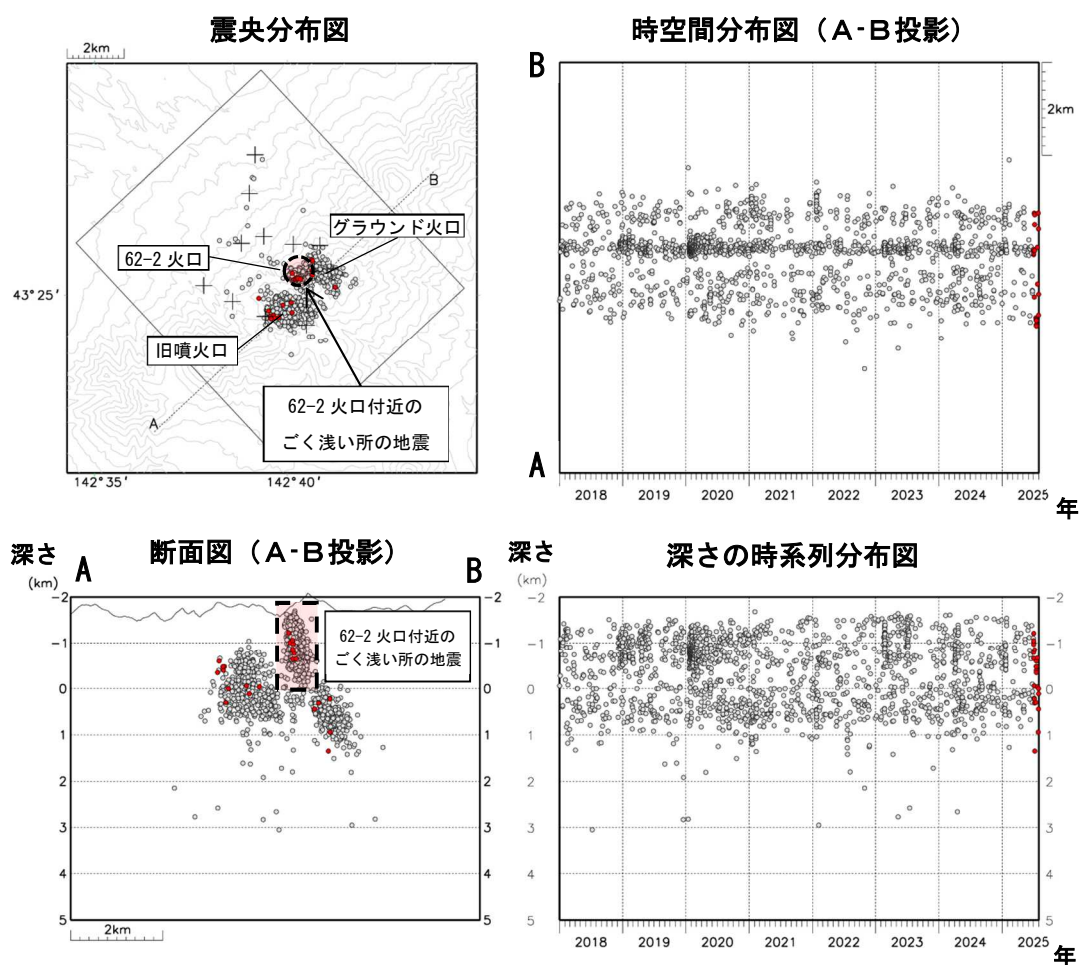


図9 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2025年7月）
 ●：2018年1月～2025年6月の震源 ●：2025年7月の震源 ＋：地震観測点

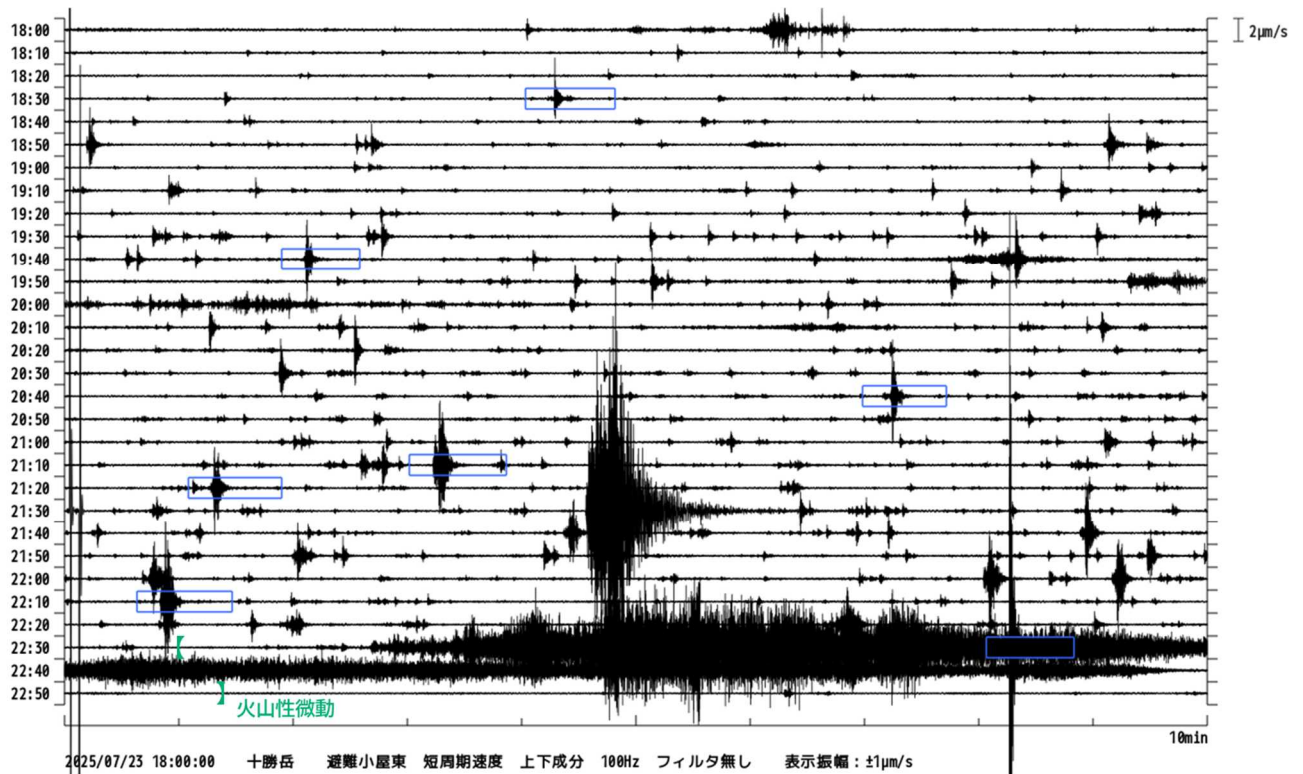


図10 十勝岳 避難小屋東の速度波形上下成分（23日18時00分～23時00分）

- ・ 23日22時32分頃に発生した62-2火口付近のごく浅い所の微動と同期して主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向がわずかに上下する傾斜変動が観測されました（図11参照）。
- ・ 傾斜変動の発生前、火山性地震（青四角）がごくわずかに増加しました。

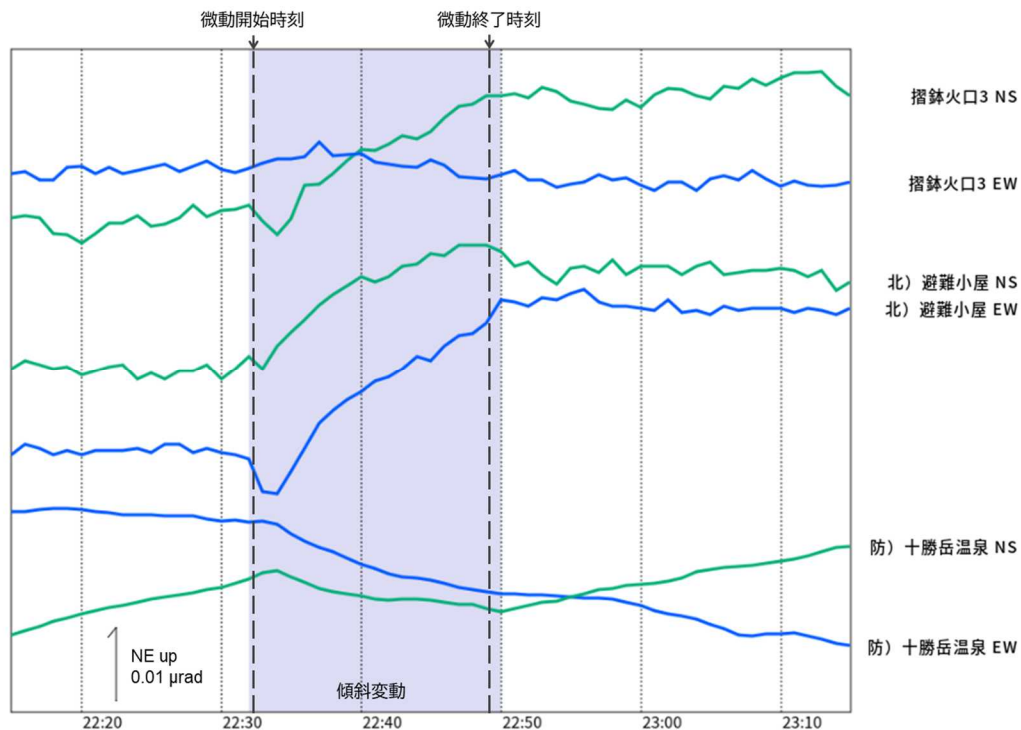


図11 十勝岳 23日に発生した火山性微動と同期した傾斜変動（23日22時15分～23時15分）

青背景は傾斜変動が発生した期間を、黒点線は微動の開始・終了時刻を示します。

- ・ 23日22時32分頃に発生した62-2火口付近のごく浅い所の微動と同期して主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向がわずかに上下する傾斜変動が観測されました。

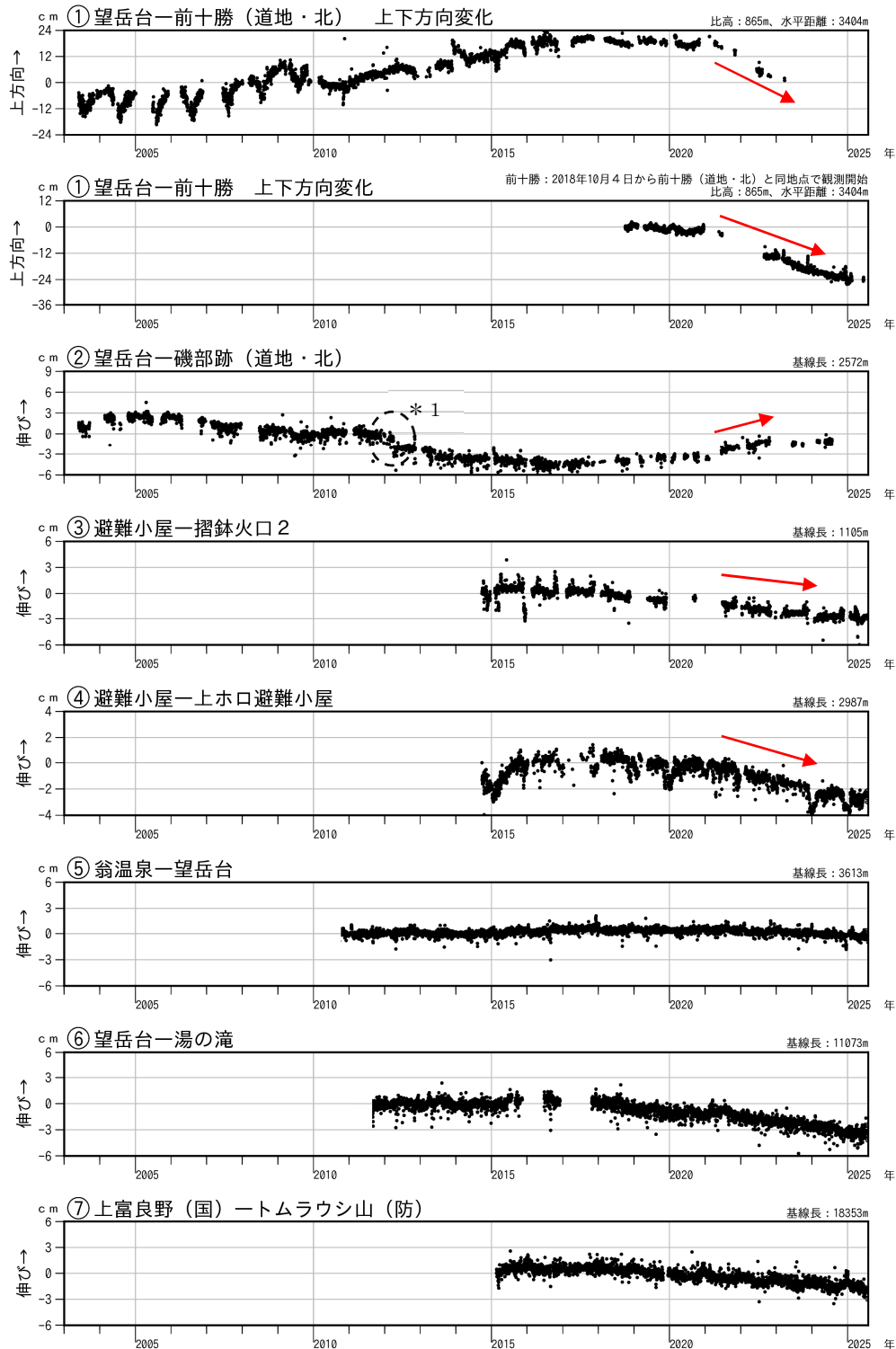


図12 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2025年7月）

グラフ①～⑦は観測点配置図（図13）の基線①～⑦に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（赤矢印）が観測されていますが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は概ね停滞しています。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線⑥⑦では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いています。

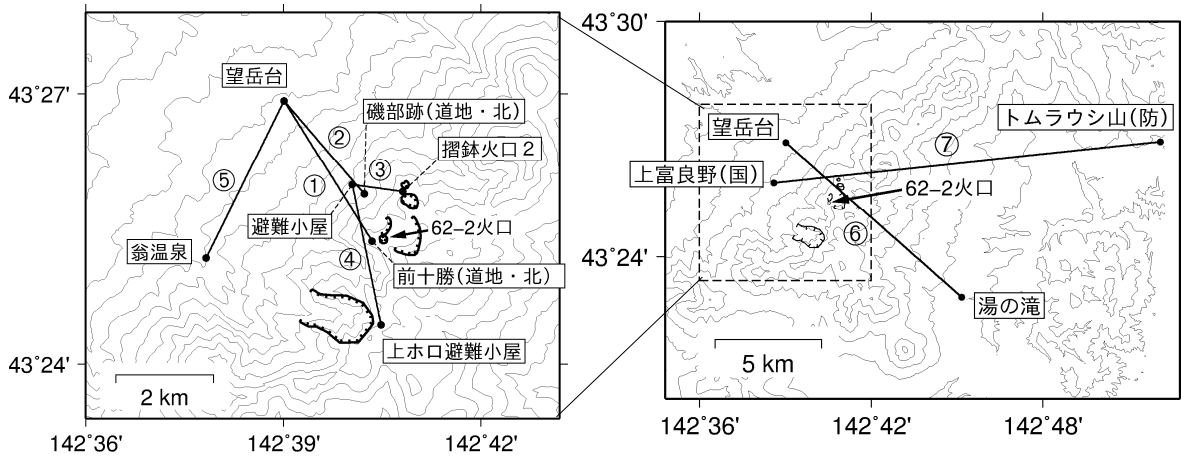
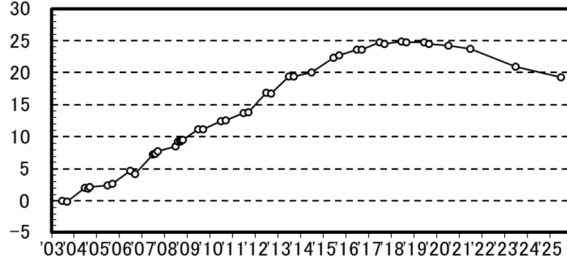


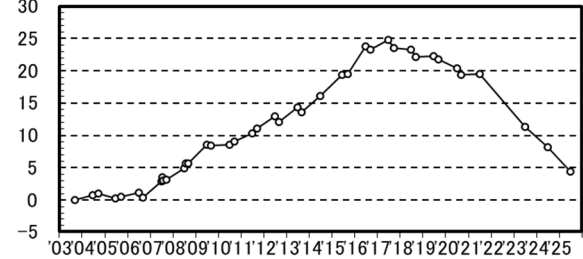
図13 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線①～⑦は図12のグラフ①～⑦に対応しています。

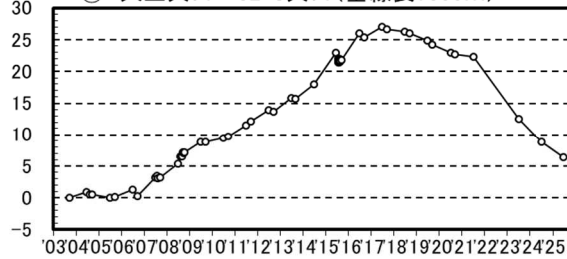
伸び(cm) ① 大正火口～グラウンド火口(基線長:461m)



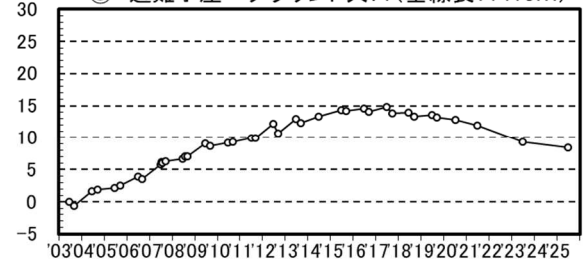
伸び(cm) ④ 避難小屋～62-3火口(基線長:1602m)



伸び(cm) ② 大正火口～62-3火口(基線長:600m)



伸び(cm) ⑤ 避難小屋～グラウンド火口(基線長:1413m)



伸び(cm) ③ グラウンド火口～62-3火口(基線長:451m)

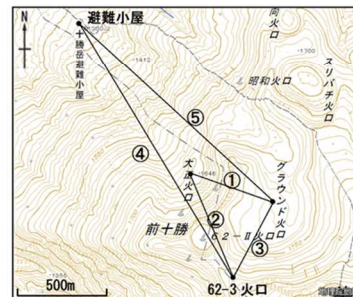
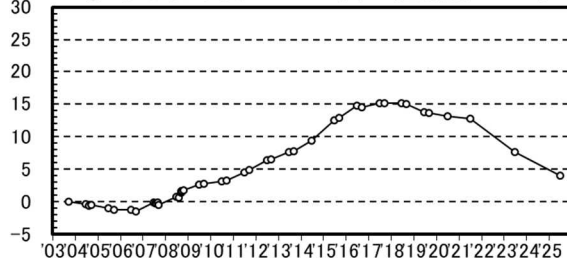


図14 十勝岳 GNSS繰り返し観測による基線長変化(2003年9月～2025年6月)及び観測点配置図

グラフ①～⑤は観測点配置図(右下図)の基線①～⑤に対応しています。

- ・2017年頃からみられていたわずかな短縮傾向は2021年頃にやや鈍化しましたが、その後はGNSS連続観測(図12)で捉えられている山体浅部の収縮を示すと考えられる明瞭な短縮が続いています。

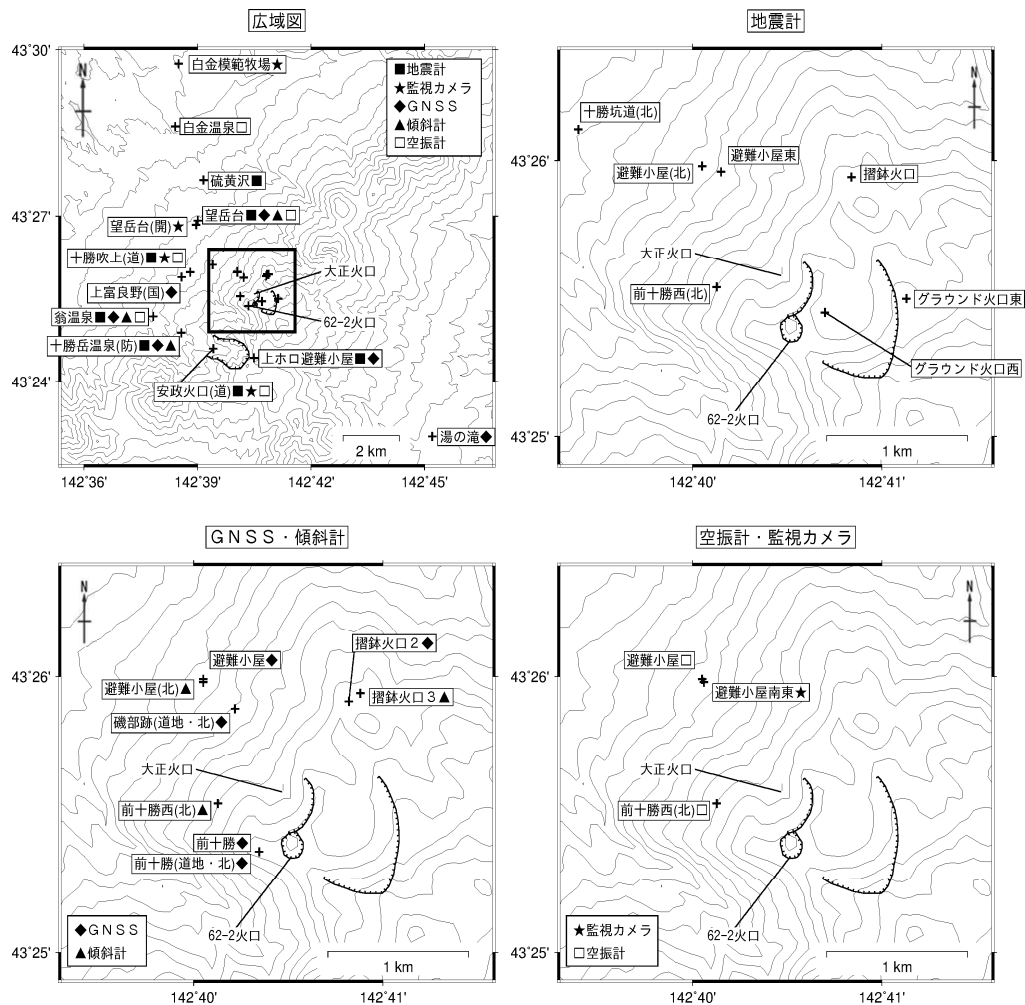


図15 十勝岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で示した領域を拡大したものです。

＋印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (開) : 国土交通省北海道開発局
- (国) : 国土地理院
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道
- (道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所